

力強く、気高い進化

筑波大学附属中学校 一年 鎌田 真衣佳

正直言って、苦手だった。一緒に居ると、どうしても気をつかってしまう。障害を持っている人は弱い存在だという思いばかりが、強かったからかもしれない。

けれど、小学五年生の時に出会った二人によって、大きく変わった。その二人は、視覚特別支援学校から、私の通う小学校へ交流にやって来た。特にその内の一人の少女は、生まれつき両目とも全く見えていなかった。

私は最初、あまり乗り気になれず、彼女達の事をしばらく遠巻きに見ていた。そうして私達の授業を一緒に受けている内に、もしかしたら天才なのかもと感じた。

まず、まだ一〜二回程しか来たことのない内に、校内を一人きりで、迷わずに歩いていた。とても不思議で担任に聞いてみたら、校内を一通り回るだけで、その形が脳内に浮かび上がるというのだ。そして、ここは何の部屋か説明されると、どんな名前が付けられ、あつという間に、大体の地図が出来上がると教えてくれた。私なんて、五年の春にようやく、社会科室を覚えたばかりだった。

それに、点字を書くスピードにも驚かされた。点字を書く、つまり穴を開ける時には、字を反転させなければならぬ。それなのに、私達がノートへ書くのと、ほぼ同じ時間で書き上げていた。多少は省略した文字になっているとはいえ、瞬時に反転までしているのは、ものすごい能力だ。

何かの能力が欠けても、その分それにも勝る別の能力が進化するのだと実感した。動物でも、同じようなことに気付く。うさぎは体が小さく、肉食動物におそわれやすい。そのため、耳をピンツと上にのばして、鳴き声や足音を聞きやすくしていた。その内に、他の動物よりも耳がのびた。しかも左右別々に動かせて、音をより聞き逃さなくなった。また、少しでも視野を広くして敵に気付けるように、顔の側面に付く眼球は丸く飛び出している。だから顔を動かさずに、三百六十度近くも見渡すことができる。

他にも、夜行性の動物は、目をあまり使えない。そのため、耳や鼻の機能が発達しているなど、足りない機能を自らの中で補いながら、危機から逃れているのだ。

交流後しばらくして、彼女達が通う学校の音楽発表会のお知らせが届いた。私は、

何としても行ってみたいと願った。

想像していた通り、同学年のどの子も、私達の演奏技術のはるか上だった。リーダーの指の動きは速すぎて、近くで見ても分からなかったし、木琴のバチの動きにも目が回る程だった。演奏間の移動なども、とてもスムーズだった。高学年が低学年を誘導したり、面倒を見たりしているところは、私達の学校とまるで変わらなかった。むしろ、助ける方も助けられる方も自然に感じられた。ありがとうという言葉は少ない気もしたが、それが逆に良い印象を受けるのは初めてだった。

意図せぬ故の進化は特に、とても力強く気高い。すでに私の苦手意識は、好意どころか尊敬に変わっていた。

現時点での私は五体満足で、五感全てにおいて不自由はない。けれどだからこそ、本能的な何かが失われているのだと言えるのかもしれない。使われない能力は、気付きもしない内に退化してしまうのだ。

かつて人間にも、尻尾があった。木の上の生活から地面におりて二足歩行の生活へと変わる途中で、使われなくなった尻尾は退化した。進化と退化は表裏一体なのだ。

私が出会った全盲の少女は、テレビのインタビュー番組で、

「目が見えないのも一つの個性だと思う。そのおかげで想像がふくらみ、楽しいこともたくさんある。時には、辛いこともあるけれど、目が見えなくて良かった。」と答えていた。私はこの言葉を一生忘れない。

障害を持つ人は、弱いどころか、強い。